

園長だより NO 85

大寒波が到来、日本列島を冷凍庫のごとく一変させていく、寒い、寒いといっちはいられないが身に染みる寒さである。物価の上昇に加え、電気、ガス代の高騰、すべてに寒さが押し寄せている。「子どもは風の子」と昔から言い伝わり子どもの元気を象徴している。天候に左右されず、一年中、天真爛漫に遊んでいるということである。昨今は家庭環境の変化もあり、家の中が快適な家庭が増えている。冷暖房機の性能も各段に上がり、床暖房の普及も広がっている。

最近の子どもたちの変化？ 大人の変化？がみられる。「外に出ない症候群」寒い日の公園はほとんど人けがない。ただでさえいないのに閑散としている。遊んでいる子どもも寒いから帰りたいと訴えている光景も目にする。

快適な生活が子どもの遊びそのものに変化を与える。保育園ではどうだろうか？ 安心安全な環境を整えることに配慮しているが室温については適度な温かさの保証にとどまる、戸外遊びもする。年齢により、当日、前後の子どもたちの体調を考慮しての戸外遊びである。

やはり、インドアに偏りすぎると情緒のバランスも崩れる、土の上に立ち、その時々のお天気と対話をしながら生活することが心の育ちには必要だと感じている。雪が降ると予想された日の前日「さー明日は雪合戦だー」と期待していたが肩透かしに合う。雪かきをすることを考えると助かったものだが、寒さの中、夢中になって遊べる機会が削がれたことは残念であった。



1 歳児
「食卓を再現」

子どもたちの遊び・・・再現・ごっこ遊び

時々、1歳児のクラスにお邪魔して子ども達の遊びを眺めることがあります。

子ども達の遊びは年齢と共に広がっていくのだなーと実感することがあります。

現場にいる保育者であれば私以上に実感し尚且つ発達にあった遊び道具や環境をどうやって整えてあげようかなと考えを巡らせていることでしょう。

1歳児クラスも殆どが2歳になっている、手足も自由に使えるようになり、遊びがどんどん豊かになってきています。この頃からごっこ遊びの基になる生活を再現する遊びが盛んに行われるようになる。

好奇心や探求心も倍増、周りの環境にレスポンスよく反応する姿も見られる、家庭(保育園)で大人がやっていることを真似したり、自分が経験したことを再現します。

自分の体験から人形(友達)の世話をしたり、絵本をよんであげたり、再現して遊びます。ひとりで遊ぶことも楽しいが周りへの関心から時にはお料理をつくり、「はいどうぞ」と関わりも生まれる。

「あー 子どもたちはよく見ているんだな。」

そして、しっかりと心と頭に経験を収納しているんだな。そしてみごとに遊びの中で再現してしまうとはすばらしい力を持っています。平坦な生活を自らのアクションで



「レンジにみためて」

楽しい起伏のある生活に変化させている。毎年のことながらも子どもたちの持ち合わせている育つ力に感心するばかりです。2歳を超えると想像力がぐんと育つていく生活を再現する遊びの広がりもみせていく。

何かになったつもりになったり物を他のものに見立てて遊ぶ姿も見られてくる。

俗にいう「つもり・見立て遊び」への移行である。

つもり・見立て遊びのはじまり

砂場でカップに砂を入れればプリンが出来上がりであり、皿に砂をのせればカレーとなる。目に入るととても厄介な砂が大好きな食べ物になっていく。本当に口にはしないが料理したものを本物に見立て食べるふりをする。ひとりが「美味しい」と言えばみんな「美味しい」と連呼、遊びの中で同調、同化することも遊びの楽しさを引き出す要素、年齢が増すごとに気の合う友達もでき、「つもり・見立て遊び」が豊かになっていく、四角い積み木を自動車に見立てて走らせたり、大好きなお母さんになり、ままごとをしたり、イメージを広げて遊んでいます。

ごっこ遊びへ

3歳以降になると、ごっこ遊びとして遊びの中の必須ツールとなる。友達との関係も重視され、おうちごっこ、電車ごっこ、病院ごっこ、忍者ごっこ etc. 友達と楽しさやイメージの共有をしながら遊びが展開されていきます。



「落ち葉のお風呂」

2023.1.31

ごっこ遊びは、社会生活の縮図と私は考えます。生活の再現あそびから、子どもなりにめあての持ったごっこ遊びへ変化するとともに、遊びの中で他者の思いに出会う、自分とは違う考えや感じかたがあることを知る、机上の教えとは異なり、身をもって体験することができる。仲よく遊ぶばかりではなく、思うようにいかないジレンマから喧嘩もある。

かかわる大人(保育者)も子どもたちの姿を受け止め、受容する。共感的に遊びを見守り受容してもらおうと他者への信頼感を抱けるようになり、友達の気持ちを理解する力の基礎になっている。

自分で 自分で (自分が 自分が)の要求を通そうとして、自分の思いが優先することで満足していたことから次第に友達の気持ちを気にしてあげられるように次第に変化していきます。

ごっこ遊びは4・5歳児頃がピークと言われ学童期まで続きます。5歳・6歳児頃にはお話や物語にそって劇(劇遊び・ごっこ)をおこない、役割を決め、ひとつの目当てにむけて活動できるようになっていきます。

ごっこ遊びは 社会性、想像力、言語力、創造力などが育まれ総合的に子どもたちの育ちを保証できるもので子どもたちの発達の大切な遊びになっています。

(おおぞら保育園 園長 廣部信隆)

「劇あそび お話を再現」

